

2024 年 3 月期決算説明会 主な質疑応答

2024 年 5 月 23 日（木）に開催した 2024 年 3 月期決算説明会におけるご質問および当社の回答は以下の通りです。※A. の（）内は回答者。

Q. ラピダス関連について、足許の資金需要、今後の見通しについて教えてほしい。さくらレポートや貸出の実績を見る限りでは、足許で需要が出ている印象はないが、今後、資金需要を見込んで良いか。

A.（中澤社長）ラピダスによる雇用創出やインフラ整備などは、まさにこれからである。足許の千歳市周辺の不動産融資の増加は想定通りであり、今後長期的な目線で資金需要は、直実に増加していくもの見込んでいる。

（兼間副社長）現在、ラピダスの工場は建設中であり、年内に建物ができる。年末から機材が入り、来年試作ラインが稼働予定。試作ラインの稼働までは 2 兆円近い国の資金が投入されて進んでいる。その後の第 2 期工事では 1 兆円を超える設備投資が必要で、この資金は民間に期待されており、2026 年以降になる見込み。足許では想定の通りアパートローンを含め、順調にラピダス進出に伴う資金需要は増加している。

Q. 利上げによって、今後資金利益が上振れした場合、資本政策をどのように捉えていくか教えてほしい。優先株式の償還のペースを早めるのも手段であり、一方普通株式の配当をどう評価していくのかもまた一つの選択肢と考える。方向感について教えてほしい。

A.（中澤社長）利益が上がった場合は、まずは総還元性向、配当性向を意識した検討が必要と考えており、その上で幅広く資本政策について検討を行うことになる。優先株式の償還ペースについては、現状の期間収益でも更に償還することもでき、選択肢の一つである。内部留保の状況、業績の見通しも踏まえ、総合的に判断していく方針である。

Q. 業績予想における当期純利益について、2 行合算ベースでは、直近期 7 億円の減益予想である一方、FG 連結ベースでは、20 億円の増益予想となっている。要因について教えてほしい。

A.（中澤社長）2023 年度決算において特別利益の計上があり、その剥落が要因となる。

Q. 有価証券の債券処理について、どのように考えているのか。今後の方針も合わせて教えてほしい。

A.（中澤社長）2023 年度において、外債中心に低利回りの債券の処理を行い、有価証券の期末残は 1 兆 7,832 億円まで落としている。預金 14 兆円規模の銀行としては、有価証券の残高は少ないと認識しており、政策金利の動向に注視して、残高を還元していく方針である。外債については、アセットスワップの活用や一部変動債の積み上げも行いながら徐々に還元することも視野に入れている。全体としては、株式含め中長期的に安定的した収益を確保で

きるポートフォリオの構築を目指している。リターンの改善に加え、残高の積み上げ余地を踏まえると、資金利益の改善効果は大きいとみている。

Q. 事業性貸出の地区別戦略について教えてほしい。

A. (中澤社長) 北陸 3 県、北海道、東名阪のそれぞれで戦略を立てている。北陸は約 30% のシェアがあり、今後もトップシェアを維持する方針。北海道はラピダス社進出などに対し、SX 分野も含めて対応を強化していくことで、グループ一体となってシェアアップを図る。東名阪は昔から取引のある先を中心に資金需要に応じていく。課題は住宅ローンで、金利上昇により、少しスローペースとなる可能性があるが、基本方針としては残高を更に伸ばしていく。本部運用貸出については、ストラクチャードファイナンスや市場性ローンなど更に積み上げていく方針としている。

Q. 貸出について、どの分野を重点的に伸ばしていくのか、優先順位があれば教えてほしい。

A. (中澤社長) 優先順位は一概には言えないが、プライムエリアでの中小企業貸出や住宅ローンにウェイト置いて伸ばしていく方針である。その中で、重要視しているのが RORA の指標であり、リスクアセット対比でより効率的なアセットを積み上げていくことが重要であると考えている。金利水準だけで比較するのではなく、付随取引も踏まえた総合採算で収益性を捉えて、アロケーションの強化を図っていく方針である。

Q.。金利上昇局面を踏まえた取引先の採算改善を図るとあるが、市場金利が上昇した際に、プライムレートを基準としている貸出なども同様に引きあがると考えてよいか。

A. (中澤社長) お客さま毎に個別の取引条件があり、一律ではない。但し、市場金利が上昇した際には、一般的には基準金利も引きあがるとみている。

以 上